

平成 29 年度第 1 回 FD・SD 研修会

「アセスメント・ポリシーと大学教育の組織的質保証」議事録

平成 29 年 7 月 20 日（木） 16:30－18:00 講義棟 5 番講義室

開会（16:30－16:35）

司会：古岡教授（FD・SD 強化担当副理事）

開会挨拶：柳川理事

本日のテーマであるアセスメント・ポリシーは、本学では昨年度に制定したばかりであり、まだ馴染みがうすい。DP（ディプロマ・ポリシー）、CP（カリキュラム・ポリシー）、AP（アセスメント・ポリシー）を検証するためのものであるが、その基本的考え方や具体的運用について、本日の研修で理解を深めていきたい。

講演（16:35－17:40）

濱名氏（関西国際大学学長）

DP、CP、AP については各種答申に盛り込まれ、高大接続答申を経て作成が法令化された。本来、DP (Learning Outcomes) とアセスメント・ポリシー (Assessment Plan：検証方法) は一体として整備されなければならないことを強く主張してきたが、後者については法令化されなかったこともあり、十分浸透しているとはいえない。PDCA サイクルでいえば C と A に相当する部分であるが、それが不十分であれば事業の意義が不明確となる。

学修成果のアセスメント（評価）に関しては、成績評価の厳格化ということが言われて久しいが、単位認定（合格）基準を厳格にするという意味や、なんでも定量的な指標で評価するという意味での厳格化では、これからの時代に求められる能力の評価などできないだろう。

アセスメントの役割は、そうした評価を行うことではなく、目標・方向性に対する振り返り（reflection）の機会を提供することにある。機関がその方針を振り返り、学生もまた振り返りによって評価の意義を理解し、将来にわたって自己の強みを評価できるよ

うになることが重要だ。その意味で、評価も教育・学習方法の一つと捉えたい。

もちろん、客観的に定量化のできる活動・成果については、定量的な評価を行えばよい。しかし、得られた数値の活用方法も検討すべきだ。たとえば、機関全体を定量的な指標で評価する IR (Institutional Research) については、他大学との比較や平均値だけを問題にするのではなく、機関内のサブグループを明確化し、それらを追跡調査できるようなデータの細かな検証が重要だろう。

一方、定量化できないもの、たとえば学生や機関のパフォーマンスについては、無理に定量化するのではなくルーブリック等の適切な評価を行うべきだ。その際、根拠 (evidence) に裏付けられた成果 (outcomes) を見ていくことが求められるとともに、評価結果をどのように活用するのかを予め定めておく必要がある。すなわち、許容できるパフォーマンスを設定しておき、それに達成しない項目がプログラムの改善 (評価プランの改善、教育内容・方法の改善、プロセスの改善) 対象として浮かび上がるようにしておかなければならない。

社会状況の変革に伴い、これからますます評価の重要性が高まるだろう。各大学には、多元的 (さまざまな指標・観点) で重層的 (マクロからミドルまでの各レベル) な自己評価を、法人評価のためというのではなく自律的・能動的に行っていくことが求められている。

質疑 (17:40 - 17:55)

金山教授

さまざまな評価とその検証を導入するには時間が必要であり、本学でも時間をかけて取り組んでいるところだ。貴学では多岐にわたる先進的実践が行われているが、組織的取り組みの方法を伺いたい。

濱名氏

たとえば各種ポリシーは委員会を立ち上げて作成するというのではなく、学長が陣頭に立ち学科長が作成するという体制でスピーディーに行った。人材としては、関連業務を専門に扱う職員が兼担ではあるが 5 名程度おり、また FD (PD: プロフェッショナル・ディベロップメント) を通じて育成した教員に大教センター長等を依頼している。FD は、たとえば実際のレポートを見ながらルーブリックを作成する、などワークショップ形式で実践的に進めていることが効果的であるように思う。

川本教授

現在担当している役務に直結し、大変興味ある内容を拝聴できた。獣医学の場合はコンピテンシーにもとづく評価が重要であり、国家試験、サマティブな評価、自己評価等の客観的評価を行っているが、それらでは測れないもう少し主観的な評価も必要ではないかと考えているが、ご意見を伺いたい。また、学生側の評価だけでなく教員の教授能力の評価についても、必要性等を伺いたい。

濱名氏

主観的評価をいわゆる間接評価のことと捉えて良いとすれば、たとえば学生調査（経験調査）やポートフォリオ等の導入が考えられる。ただしこれらの評価方法は必ずしも確立しているものではない。教員評価については、授業の巧拙を問うのではなく、あくまでも学生の達成状況という結果を通して評価していくべきだろう。

川本教授

授業に関しては学生による授業評価等を行っているが、その他に卒業生調査や就職先を通じた評価等も有効か。

濱名氏

Alumni 調査は機関全体の教育評価として有効だが、その結果を個々の授業・科目レベルに落とし込むことは難しいだろう。

井上理事

国立大学はこれまで「事業」の持続可能性を考えず、私立大学とはまったく状況が違っていたといえるが、これからは考え直す必要があると考えている。特に旧帝大等の学生は勝手に学んで卒業していき、大学はその場を提供していただけであったが、私立大学はさまざまな危機的状況を経験してきた。そういった経験の無さから危機意識に欠けるという点で、国立大学はやはり遅れているとお感じだろうか。

濱名氏

確かに「困っていない」国立大学は改善する必要性を感じていないという点で、随分と恵まれていると感じている。ご指摘の通り私学は非常に大変だが、これからの時代、

講演でも述べたように社会が大きく変革するなかで、国立大学も持続可能性を考えて認識を改めていくべきだろう。

奥田学長

機関・事業のアセスメントに関連する考え方として、KPI(Key Performance Indicator)や KGI(Key Goal Indicator)があるが、大学の教育活動の評価においては何をもちええるべきか。

濱名氏

これらは必ずしもどのような大学の評価にもなじむというものではないと感じているが、たとえば大学ポートレートなどは KPI になりうる。国公立と私立、総合大学と単科大学でも捉え方が違う。各大学の状況に応じて考えていくべきものだろう。

閉会（17:55－18:00）

閉会挨拶：奥田学長

有益な講演に感謝申し上げます。本学でもアセスメント・ポリシーを昨年度制定したが、その実質について理解が深まった。熱くわかりやすいご講演にあらためてお礼申し上げます。

文責：齊藤（教育支援室）

2017年7月20日（木）帯広畜産大学

アセスメントポリシーと 大学教育の組織的質保証

関西国際大学
学長 濱名 篤

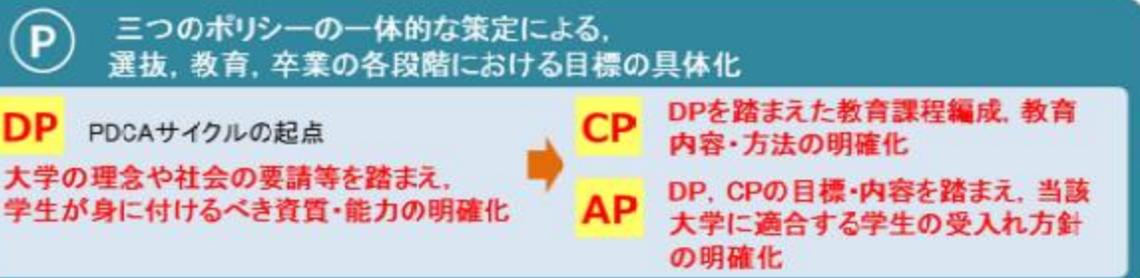
質保証についての現状と可視化の方向性

「三つのポリシー」に基づく大学教育改革の実現(イメージ)(案)

三つのポリシー … ディプロマ・ポリシー(DP), カリキュラム・ポリシー(CP), アドミッション・ポリシー(AP)

＜大学教育に関する内部質保証のPDCAサイクル＞

ポリシーの策定単位ごとの
教学マネジメントを担う者が主体となり実施



情報の積極的な発信

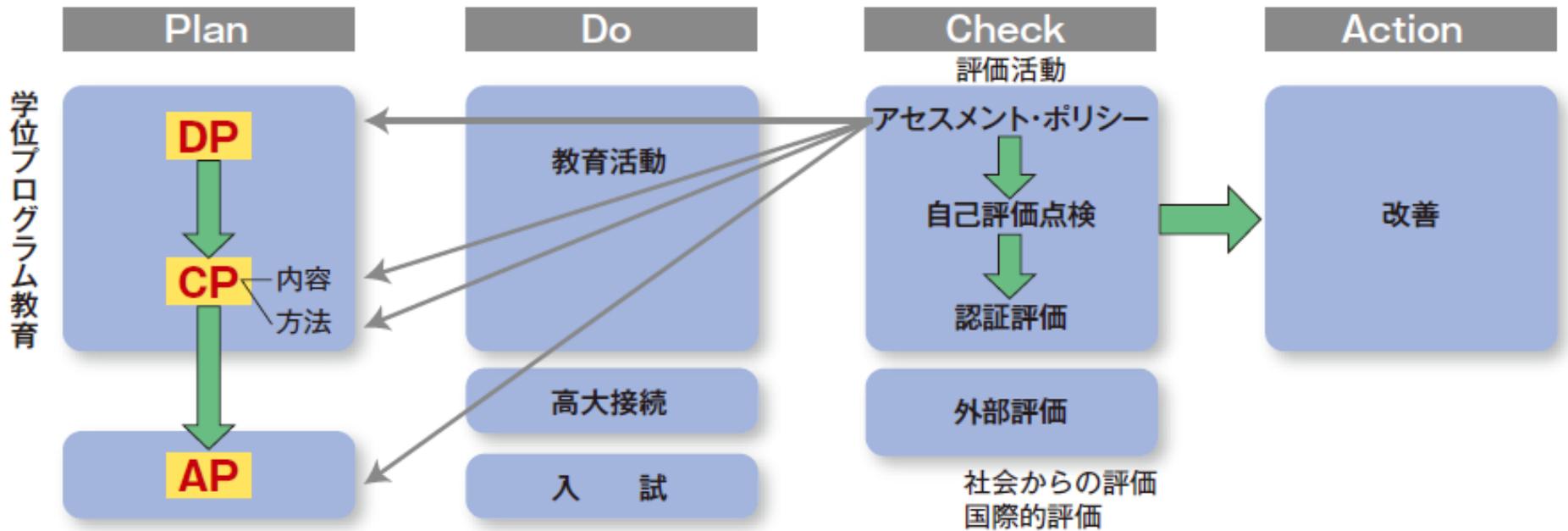
認証評価

内部質保証を重視した評価への発展・移行

三つのポリシーの策定及び運用に関するガイドライン (中央教育審議会大学分科会大学教育部会)

- 省令改正 ① 三つのポリシーの策定・公表の義務付け (学校教育法施行規則)
- 省令改正 ② 三つのポリシーに基づく大学教育に対する認証評価項目の追加 (学校教育法第百十条第二項に規定する基準を適用するに際して必要な細目を定める省令)

出典:平成28年3月9日開催 中央教育審議会大学分科会大学教育部会(第43回)資料



出典:リクルート カレッジマネジメント198 May-Jun.2016

高大接続答申の中の3つのポリシー＋α

- 3つのポリシーの一体的な作成を法令上位位置づけることがはっきり明記された（答申20頁）
- 大学全体としての共通の評価方針（アセスメント・ポリシー）を確立した上で、学生の学修履歴の記録や自己評価のためのシステムの開発、アセスメント・テストや学修行動調査等の具体的な学修成果の把握・評価方法の開発・実践、これらに基づく厳格な成績評価や卒業認定等を進めることが重要である（答申21頁）。

質保証の可視化の方法

- 一元尺度や一律の定量化が妥当か？
- 抽象度が高い、検証不可能な評価で社会は納得するか？
- 問われているのは、何の評価？ 学生個人？各授業科目？教員？
学位プログラム + 大学全体 が優先 + 個々の学生
- ポリシーの設定は「検証（測定）ができる」ことが必要条件
- 評価方法は目的合わせて多元的・複眼的に（一つの尺度・方法では適切か？）

Key Performance Indicatorによる指標管理

KPIによる目標管理と質保証

- 関西学院大学 戦略指標ダッシュボード
大学のマネジメント活動全般に目標と指標を設定
but 学修成果については？
- 必要条件としてのIR充実による情報収集・分析



関西学院マネジメント戦略指標ダッシュボード モデル

<2014年度版>

関西学院 マネジメント戦略指標(KPI) ダッシュボード

2013年度

ブランドイメージ

一校校としての認知

24.2
22.7 **24.2** △

定義

現水準

変化の方向性
▲ 上昇
▼ 低下
変化の重要性
白文字：交点
黒文字：悪化

過去5年の最高値
過去5年の最低値

22%
2% **20%** ▼

教育

スクールモットー浸透度

24.7
22.8 **24.7** △

卒業後の有用性

汎用的能力の獲得状況

66.9%

※「ダブルチャレンジ制度」単位取得費額

NA

DPの達成度

※TOEIC一定基準以上の学生数(比率)

4.1%

※SGI関連指標

入学

入学難易度比較

65.0
62.8 **65.0** △

同系列学部勝敗

47.8
38.8 **47.8** △

高校「平均ランク」比較

6.5
6.2 **6.3** -

一般入試：推薦入試比率

NA
NA **49.4%**

就職

就職率

97.8
96.2 **97.8**

就職決定率

87.6
82.8 **87.6**

就職先への満足度

95.5
89.2 **95.5**

有力400社への就職率

36.4%
24.3% **24.3%** ▼

国際化

※年間派遣留学生数(協定校)

1,033
411 **1,033** △

※年間派遣留学生比率(協定校)

4.3%
1.8% **4.3%** △

※年間受入留学生数

867
534 **839** △

※国連・国際機関等の

-

※SGI関連指標

満足度

学生満足度

55.6%
47.7% **55.6%** △

母校推薦度

83.5%
68.4% **68.4%** NA

財務

附属収支差額比率

12.0%
6.2% **11.7%** △

過去5年間の消費収支比率平均

2.3%
-2.6% **2.3%** △

実質支出超過額比率

-32%
-48% **-32%** △

教育研究経費比率

25.9%
22.6% **23.8%** ▼

新規学費財源

定量的指標による実証

語学力向上という学修成果（宮崎国際大）

- MICの教育の特色を永田前学長に伺うと、「リベラルアーツ教育重視」、「英語による授業」「グローバル人材の育成」、の3つのキーワードが返ってきた。
- 具体的には、英語によるリベラルアーツ教育とクリティカルシンキングを取り入れた教育方法である。
- **TOEICスコアが4年間で「平均」350点程度から642点に上昇するという結果**
- 専任教員に占める外国人教員の多さである。国際教養学部（入学定員80人）の場合、35人の専任教員の中で外国人教員は83%に達する（教育学部は入学定員50人で教員15人）。専任教員1人あたりの学生数（S/T比）で見れば学生11人对専任教員1人に相当する。1クラス20人以下での授業が行われ、日本の私立大学でもトップクラスの教育条件である。
- **現在、クリティカルシンキングの測定テストを開発中**

参考：英語力向上の秘密は

- 驚異的に英語力を向上させる英語教育の内容・方法は、ネイティブの教員が20名以下で3レベルの習熟度別に英語の授業を受けるというのが基本。レベル分けは三つの指標（英語でのインタビュー、文法テスト、TOEIC）で入学時に行われる。相対的に3レベルにクラス分けされるが、TOEICでいえば、上レベル400点、中レベル400～300点、下レベル300点未満であるという。

学修成果の位相

Salt Lake Community College の例

ミクロ Course Outcome (科目) — ANTH 1030 : 学生が文明の隆盛の理由や経済の変化等について、考古学で残留する科学者の間の様々な解釈や潜在的な conflicts についての分析するペーパーを書くことができる。

ミドル Program Outcome (科目群・コース) — Anthropology 人類学 : 学生は人類学のテーマ、理論、方法、解釈、議論、およびアイデアについてプロフェッショナルな標準と一致する方法で分析的かつ比較的に、話しができ、書くことができる。

マクロ General Education Outcome (一般教育全体)
— 学生が効果的にコミュニケーションできる

Salt Lake Community College(SLCC) ASSESSMENT PROCESS

- IRが卒業生の中からサンプリングを行う
- e-Portfolio コーディネーターが教員からなる評価チームを編成する
- 各チームがそれぞれの学修成果に焦点を当てた評価活動を実施
- 評価チームごとの結果についてコンセンサスづくり。
- レポート執筆、学内配布

San Diego State University (SDSU)

BS • BA COMMON GOALS ASSESSMENT PLAN (Revised April 2015)

- Mission/Vision Statement
- Consistent with the overall mission of the College of Business Administration at SDSU, the Undergraduate Program seeks to maintain a challenging learning environment that fosters excellence in business education. **The program prepares students to be** ① **ethical and discerning critical thinkers** with a global perspective, ② solid communication skills and ③ a strong foundation in business knowledge.

Program Learning Goals & Degree Learning Outcomes (SDSUの事例)

I. Written and Oral Communication - Communicate effectively with individuals, teams, and large groups, both in writing and orally.

- Degree Learning Outcomes: DLO #1.1: Write well-organized and grammatically correct papers including letters, memos, case analyses, and research reports. DLO #1.2: Make effective oral presentations that are informative as well as persuasive, as appropriate.
- Written Communication ☑ Assessment method: Scores on the University Writing Placement Assessment. ☑ Assessment timing: Each spring semester.
- Oral Communication ☑ Assessment method: Oral Presentations in capstone courses throughout the CBA rated using officially adopted CBA Oral Communication Skills rubric which had been distributed to students. ☑ Assessment timing: Every fourth semester (Fall Term).

II. Analytical and Critical Thinking Skills - Demonstrate effective analytical and critical thinking skills to make an appropriate decision in a complex situation.

- Degree Learning Outcomes: DLO #2.1: Apply relevant information and arrive at a wellreasoned conclusion.
- ☑ Assessment method: Final exam essay question from BA 405 (college-wide capstone course) rated by two raters using a Critical Thinking rubric. ☑ Assessment timing: Every fourth semester (Spring Term). III. Ethical Reasoning - Distinguish and analyze ethical problems that occur in business and society, and choose and defend ethical solutions.
- Degree Learning Outcomes: DLO #3.1: Explain the various ethical dimensions of business decision making.
- DLO #3.2: Explain the role of various affected parties in business decision making.
- ✓ DLO #3.3: Assess the ethics of decision alternatives using different ethical decision rules.
- ✓ DLO #3.4: Apply ethical decision-making rules and concepts.

• 以下 省略

関西国際大学における3ポリシー とアセスメントポリシー

関西国際大学の基本情報

尼崎キャンパス（兵庫県尼崎市）

教育学部

■ 教育福祉学科 こども学専攻／福祉学専攻

■ 英語教育学科／英語コミュニケーション学科

※2017年度より英語コミュニケーション学科に名称変更

人間科学部

■ 経営学科

三木キャンパス（兵庫県三木市）

人間科学部

■ 経営学科

■ 人間心理学科

保健医療学部

■ 看護学科

学生数：学部名
大学院 31名

専任教員数：106人

（2017年5月1日現在）

.....

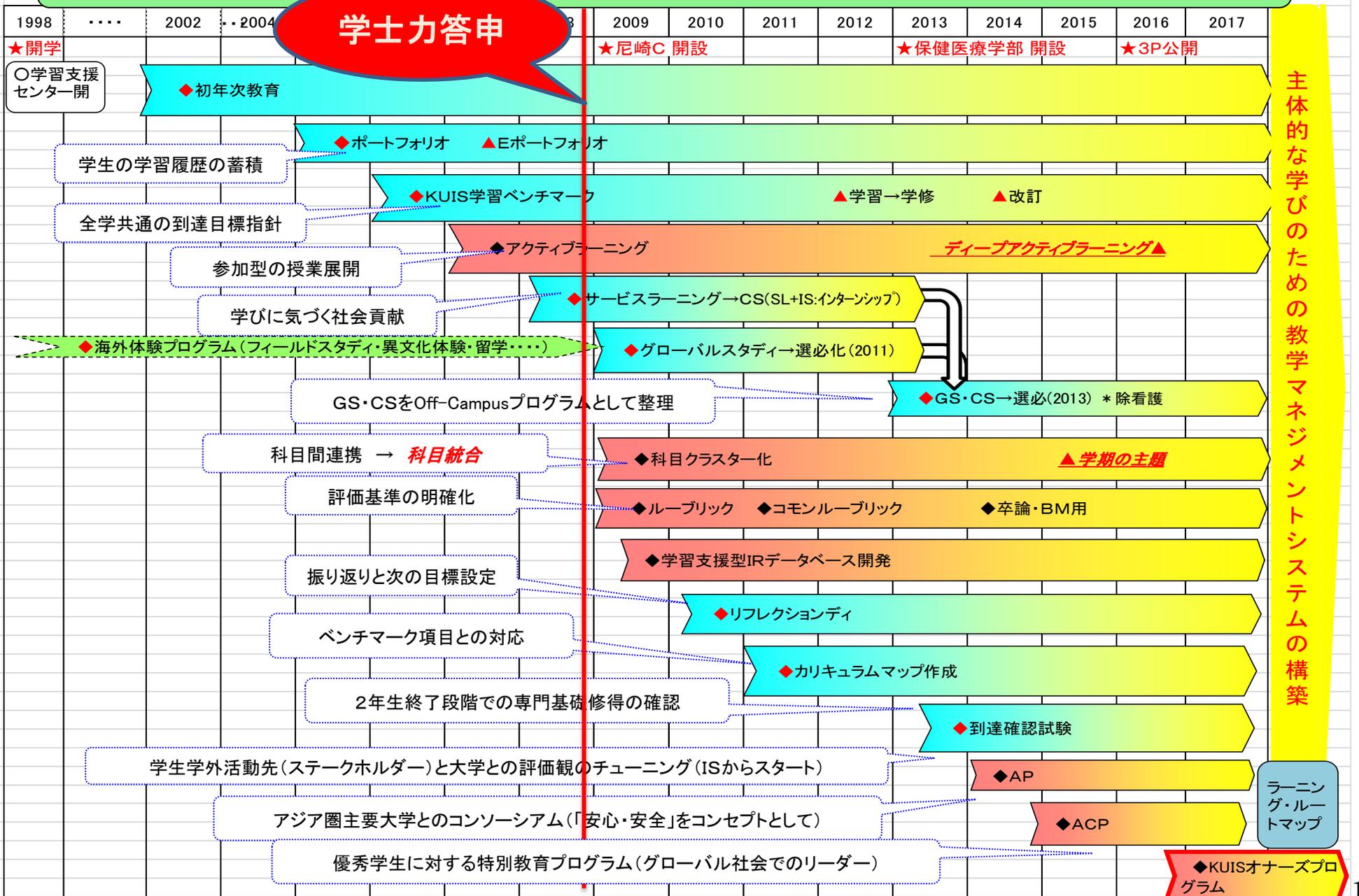
大学院

● 人間行動学研究科

人間行動学専攻（修士課程）、臨床教育学専攻（修士課程）

● 看護学研究科 看護学専攻（修士課程）

教育改革に関する全学的な取組の流れ(～2017)



KUIS学修ベンチマーク(大学としての共通到達目標)項目

《KUIS学修ベンチマーク(大項目・中項目)》

大項目	大項目の説明	中項目	中項目の説明
自律できる人間になる	自分の目標をもち、その実現のために、自ら考え、意欲的に行動するとともに、自らを律しつつ、自分の行動には責任が伴うことを自覚できる	知的好奇心	新しい知識や技能、社会におけるさまざまな現象や問題を学ぶことに、自ら関心や意欲をもつことができる
		自律性	自分の行動には責任が伴うことを自覚し、自らを律しつつ設定した目標の実現に向けて積極的に取り組み、最後までやりとげることができる
社会に貢献できる人間になる	社会の決まりごとを大切に考え、社会や他者のために勇気をもって行動し、貢献することができる	規範遵守	複数の人々と暮らす社会の決まりごとを尊重し、その背景や意義を理解して、協調的に行動することができる
		社会的能動性	自分の役割や責任を理解し、他者との積極的な協働や交流を通して、社会のために行動することができる
心豊かな世界市民になる	多様な世界の人々や自分たちの社会について理解を深め、他者に対する共感的な感覚や態度を身につけ、世界市民として行動できる	多様性理解	自分や、自分と同じ社会的・文化的背景を持つ人たち、異なる社会的・文化的背景を持つ人たちがいることを理解し、多様な世界や社会を大切に考え、柔軟に行動することができる
		共感的態度	他者と接するときに、感覚や感性を働かせ、相手の立場に立って考え、共感を示すことができる
問題解決能力を身につける	状況に応じて、情報ツールを活用し、情報収集や情報分析ができ、問題を発見したり、解決のアイデアを構想したりする思考力や判断力を身につけ、問題を解決することができる	情報収集・活用力	必要な情報や信頼できる情報をさまざまな方法を使って集め、解決の視点から必要な情報を取捨選択し、整理・保存しながら活用することができる
		問題発見力	現状から何が問題であるかを発見し、その解決に向けた課題を考えることができる
		論理的思考/判断力	偏った判断をすることなく、その時・その場の状況(TPO)に応じて判断し、論理的に考えることができる
		計画・実行力	問題解決に向けて見通しのある計画を立て、検証及び修正しながら実行することができる
コミュニケーション能力を身につける	社会生活を営む上で、他人の思いや考えを受け止め、理解するとともに、自分の思いや考えを的確に表現し、意見を交わすことができる	自己表現力	言語的及び非言語的な表現方法を工夫しながら、自分の思いや考えをわかりやすく効果的に表すことができる
		意見交換・調整力	他者の発言を傾聴し、文章を読解して、その内容の要点をとらえ、自分の疑問や主張をまとめて、他者と意見の交換や調整をすることができる

教育福祉学科

卒業認定と学位授与の方針（DP）

教育福祉学科(以下、「本学科」という)では、本学の課程を修め、126単位の単位修得と必修等の条件を充たしたうえで、グローバルな視野に立った教養と専門知識・技術を修得し、専門職として活躍できうる実践力を身につけた教育・福祉人材として、下記の力を身につけた人に対して学位を授与します。

(1)自律的で意欲的な態度（自律性）

教員・社会福祉従事者としての目標を明確に持ち、教育・社会福祉業務に主体的・自律的に取り組むことができる。

(2)社会や他者に能動的に貢献する姿勢（社会的貢献性）

教員・社会福祉従事者として地域社会の動向をふまえ、教育や福祉の現場において必要とされる実践力を身につけ、社会や他者のために責任ある行動をとることができる。

(3)多様な文化や背景を理解し受け入れる能力（多様性理解）

教員・社会福祉従事者として、対象者がもつ背景や属性、価値観等の多様性を理解し、相手の立場を尊重することができ、地域、保護者、他職種等との連携・協働を行うことができる。

(4)問題発見・解決力

教員・社会福祉従事者として、教育や福祉の現場の諸課題についての問題を発見・理解し、問題解決に必要な論理的・実践的知識および資源を活用し、適切な研究・実践方法を選択・計画し、行動することができる。

(5)コミュニケーション能力

教員・社会福祉従事者として教育や福祉の現場で円滑なコミュニケーション力を獲得し、相手の立場を尊重した人間関係を構築することができる。

(6)専門的知識・技能の活用力

教員・社会福祉従事者として必要とされる教育学や社会福祉学の体系的な知識や学修成果を活用して、状況に応じ総合的に活用することができる。

教育福祉学科CP

本学科では、卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）に掲げた目標を達成するために、次のような教育内容と方法を取り入れた授業を実施し、教育評価を行います。カリキュラムの体系を示すために、科目間の関連や科目内容の難易度を表現する番号をふるナンバリングを行い、カリキュラムの構造をわかりやすく明示します。

1 教育内容

(1)4年間を通じた学修の基礎となる共通教育においては、必修科目「人間学」を中心に「人間の理解」、「社会と生活」、「科学と生活」の3領域の履修を通して、現代社会における広範な問題の理解のための基本的視点・考え方を学びます。さらにそれらの学びを生かし、自らのキャリアを考えるキャリア教育科目を学びます。

(2)コモンベーシック科目群では、初年次教育をとおり、大学への適応をはかり、大学における基本的な学習スキルと社会に出てからのコミュニケーション・スキルを修得します。学習技術、コンピュータ技術、外国語科目などを通して、情報収集を含むコミュニケーション能力の獲得をはかります。

(3)既修外国語である英語教育においては、習熟度に基づくクラス編成をとり、定期的に外部テスト等を用いて習熟度を確認し、学生自身の学修進度にあった英語を活用したコミュニケーション能力の育成をはかります。

(4) 教育や社会福祉等の現場で求められる知識・技能の修得のための専門教育科目を、1年次から4年次にかけてコースや分野別に体系性・順序性を考えて配置します。

(5)入学時に、こども学専攻教育・保育コース、こども学専攻教育専修コース、福祉学専攻の専攻・コースに分けて教育課程を設定します。こども学専攻教育・保育コースは、保育や初等教育、特別支援教育、こども学専攻教育専修コースは、初等教育、特別支援教育、福祉学専攻は社会福祉等の現場で求められる知識・技能の修得のための専門教育科目を、1年次から4年次にかけて体系性・順序性を考えて配置します。

(6)すべての学生は国外における体験活動として、2年次もしくは3年次に海外プログラム(グローバルスタディ)の履修を行い、その参加に先立ち、「リサーチ入門」を必修科目として1年次後半に履修します。

(7)すべての学生に、1年次において、地域における体験活動としてサービスマーケティング、またはインターンシップの履修を選択必修とし、積極的に地域へ貢献する学外活動に参加します。

(8)入学時の専攻・コースで取得可能な資格・免許が取得できるよう、保育士資格・幼稚園教諭免許・小学校教諭免許・特別支援学校教諭免許取得・社会福祉士国家試験受験資格等の取得に必要な科目を、1年次から体系的・系統的に配置します。

(9)教育や福祉の現場で求められている実践的能力の育成のために、特別支援教育関連科目と初等教育での英語教育科目（初等英語教育研究、発音指導等）の履修を奨励します。

(10) 学生全員が「評価と実践Ⅰ」と「評価と実践Ⅱ」を履修し、評価の意義と重要性に関する知識・理解のうえに、自分自身の学修の成果に関する自己評価を行い、それを第三者に説明できるようになることが求められます。

2 教育方法

(11)主体的な学びの力を高めるために、アクティブラーニングを取り入れた教育方法を専門教育科目で実施します。

(12) 専門教育科目においては、教室外学修の課題を課す時期と課題の整合性・連続性をはかり、形成的評価のための期中のフィードバックを行います。

(13)教員や保育士、社会福祉士等の免許や国家資格に必要な専門的知識の能力確認のために外部テストの受験及びeラーニングによる自己学習の推進や結果の継続的なモニタリングを行います。また、学科教員による採用試験・国家試験対策のための時間を開設し、1年次から段階を追ったプログラムを実施します。

(14)目標・記録・評価の総合的ツールであるeポートフォリオという目標・記録・評価ツールを4年間かけて作成し、自己の学修成果と学生生活を自分自身で管理し、「ふりかえり」を行います。

(15) 各学期末にKUIS学修ベンチマークの達成度について学生による自己評価を行い、アドバイザー教員との面談を通し、「ふりかえり」を行います。

3 教育評価

(16) 2年生終了時には、それまでの専門必修科目の水準を修得し、卒業研究を履修する基礎レベルが修得できているかを確認する「到達確認試験」を行い、不合格の者には再試験を課し、その合格を求めます。

(17) 4年間の学修成果は卒業研究(必修)によって行い、複数教員によって評価ルーブリックを活用し総括的評価を行います。卒業研究の履修条件としては、履修規程に定める累積GPA、3年次までの修得単位数に加え、上記「到達確認試験」の合格を求めます。

教育福祉学科

入学者選抜の方針（アドミッション・ポリシー）

本学科は、卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）及び教育課程編成の方針（カリキュラム・ポリシー）に定める教育を受けるために必要な、次に掲げる知識・技能や能力、目的意識・意欲を備えた人を求めます。

- (1)高等学校の教育課程を幅広く修得している。
- (2)教育、保育、社会福祉領域の専門性の高い仕事に就く意欲がある。
- (3)教育や社会福祉の専門的な知識・技能を学修するための基盤となる日本語運用力（文章読解力、漢字検定3級以上程度）や表現力（課題に応じた内容をまとめる力、文章を読んでまとめる力他）を身につけている。
- (4)基礎的英語力(英検3級程度)を身につけている。
- (5)教育や社会福祉に関する諸課題について、知識や情報をもとにして、筋道を立てて考え、その結果を説明することができる。
- (6)学校でのグループ学習や課外活動・ボランティア活動等の経験があり、他の人たちと協働して活動や学習をすることに進んで参加したり、課題をやり遂げたりすることができる。
- (7)入学前教育として求められるeラーニングプログラムに最後まで取り組むことができる。

KUISのディプロマポリシー



3つのポリシーを可視化するためのアセスメント

基本は学位プログラム単位でのアセスメント（全学の方針）

全学の方針を前提にポリシーをつくる（学部・学科or 学位を単位に）

- 検証・測定に必要な「**観点・基準standard**」と「**尺度criteria**」
定量化しやすい評価（国試合格率、標準化テスト・スコア等）

定量化しにくいパフォーマンス評価（ルーブリックを活用した学修成果の評価や行動評価、eポートフォリオ、フォーカス・グループ・インタビュー等）

- c f . 面接試験の評価は観点・基準は共有されている？
CPを充たした教育が行われている？
DPを充たした学修成果が上がっている？
DPやCPに必要な条件を測る選考を行うことを明らかにした
APになっている？ APが必要な能力や条件を測っていた？

関西国際大学のアセスメントポリシー

(1) 大学および (2) 学部・学科を対象とする評価

大学および学部・学科が掲げる学修到達目標（教育目標）が達成されているか。また、達成されるカリキュラムになっているか。

- 学生のベンチマークチェックを集計
- 大学全体あるいは学科別の達成状況を把握。
- 2年生修了段階での専門必修科目を出題範囲とする到達確認試験の結果
- 卒業研究（サンプリング）をループリックを用いて集団評価（試行中）



<教育改善・施策>

- 達成度の低い項目の要因分析
 - ベンチマークに掲げる目標を達成するための活動
 - 機会が十分か？目標レベルが高いのか？
- ある項目のレベルが上昇した学生とそうでない学生との比較（学生調査、テスト、ポートフォリオ） = IRの活用

関西国際大学のアセスメントポリシー

(3) 学生個人を対象とする評価

各個人の学生が学修到達目標を達成しているか。また、達成していることを他者に示すことができるか。

リフレクション・デイ：9月末、3月末～学期はじめ

- 成績表、前学期に受講した科目のレポートやテストの採点結果を学生に返却
- 前学期のふりかえり
- **ベンチマークチェック**
- 今学期の目標と計画の設定
- アドバイザーとの面談

学生が授業でベンチマーク（目標）を自覚することが重要



ループリックを活用した アセスメントの可能性

ルーブリックを活用したアセスメント

◎パフォーマンス評価（定性的評価）を可視化するのに有効なルーブリック
ルーブリックとは…

◎評価の「観点」と「尺度」を組み合わせた評価表（記述語で説明された表）をあらかじめ公開し、評価者、被評価者、社会で共有でき、可視化を促進

- 背景としての国内外（中央教育審議会）の動き
 - 世界的な質保証の動きex. 米国AAC&U VALUE Rubrics
 - 「学士課程教育の構築に向けて」答申、H20.12
- 学内の事情
 - 多様な学生層の受け入れ
 - ユニバーサル段階で学生の多様化が顕著
 - 教育上の課題
 - 学修成果の可視化（=何ができるようになったか）
 - 評価にバラつきあり（人による・時点による）

学修評価へのルーブリックの活用

本学ではパフォーマンス評価をするに最適なツールとしてルーブリック（評価基準）を開発し活用することで、学生個々の能力向上を図っています。

- テストだけの評価ではなく、定性的な評価に向いているといわれているパフォーマンス評価の方法の一つであるルーブリックを組織的に導入。
- 課題と同時にルーブリックを学生に提示することにより、学生が到達目標を意識することが可能。
- 評価後のルーブリックを学生に返却することにより、自分が現在どのレベルにあるのかを、学生自身で確認することが可能。
- 評価基準が教員間で共有されるので継続的・体系的評価が可能。

■ ルーブリックの一例 [コモンルーブリックライティング(下位学年用)]

レベル	3	2	1	0
課題に対する記述	課題に対する解答が書かれている。	課題に対する解答を部分的に書いている。	課題に対する解答を書こうとしているが論点にズレがあり、テーマに対する解答として十分ではない。	課題と関係ない内容を書いている。
論理的構成	結論に至るまでの論理的なプロセスをたどることができる	結論に至るまでのプロセスはたどれる。前後関係の構成に工夫が必要である。	結論に至るまでのプロセスが整理しきれていない。	結論に至るまでのプロセスを示していない。
レファレンス資料(着想を得たものや自分の考えを支持するための先行研究や文献、データ)	レファレンス資料を適切に示して、引用や注をつけている。	レファレンス資料を示そうとしている。引用・参照方法に改善が必要である。	レファレンス資料を参照していることがうかがえるが、示していない。	レファレンス資料を使っていない。
文章の体裁 ①段落が適切に作られている。 ②句読点の付け方が適切である。 ③主部と述部の対応にねじれない。 ④文体が統一されている。	文章の体裁の項目に配慮できている。	文章の体裁の項目のいくつかは配慮できている。	文章の体裁に配慮しようとしているが、不十分である。	文章の体裁が整えられておらず、読み進めることができない。
表現の推敲 ①同じ言葉の繰り返しや多用がない。 ②誤字・脱字がない。 ③仮名使い・送り仮名の誤りがない。 ④専門用語を正しく用いている	表現の推敲ができています。	表現の推敲のいくつかはできている。	表現の推敲をしようとしているが、不十分である。	表現に間違いが多く、推敲が不十分である。

目 標 \ レベル	レベル4	レベル3	レベル2	レベル1
複数の研究方法を活用し、教育・社会事象を理解し、説明することができる	教育・社会事象について、複数の研究方法を有効に組み合わせて分析し、説明することができる	自分が関心を持った教育・社会事象について、適切な教育や福祉の研究方法を選んで、説明することができる	教育・社会事象を、教育や福祉の観点から、特定の研究方法を使って説明することができる	教育・社会事象を、教育や福祉の観点から研究する方法を複数知っている
教育・社会事象に関して、教育学や社会福祉学の体系的な知識を使って理論的に説明し、実践を改善する方策を提案することができる	教育・社会事象に関して、専攻する教育学または社会福祉学を含む体系的な知識を活用して理論的に説明し、実践的内容について改善する方策を提案することができる	自分が研究関心を持った現実の教育・社会事象を、専攻する教育学または社会福祉学の体系的な知識や理論を用いて、説明することができる	特定の教育・社会事象について、専攻する教育学または社会福祉学の概念や理論を用いて説明することができる	教育・社会事象についての説明に必要な、教育や福祉の基本的な概念や理論について、理解し説明することができる
教育や福祉の場面において必要となるコミュニケーション力を獲得し、円滑な人間関係を構築することができる	教育や福祉の場面で多様な人たちとの対人関係において必要となるコミュニケーション力を獲得し、どのような場面でも円滑な人間関係を構築することができる	教育や福祉に関わる場面で必要とされる対人関係を、円滑に形成していくためのコミュニケーション力を、実習等の場面で発揮し実践することができる	教育や福祉に関わる円滑な対人関係を形成していくために必要なコミュニケーション力とはどのようなものであるか理解し、教室内のグループワーク等で活用することができる	基本的なコミュニケーション力とその具体的な技法について理解し、一定条件のもとで実践することができる
知り得た知識、経験を総合化し、実際の生活で活用することができる	知識・経験・振り返りの成果を総合化し、体系的にまとめた上で、生活上の具体的な問題の解決に活用することができる	教室内外で学習した知識と、自らの経験とその振り返りの成果を総合化し、体系的にまとめることができる	教室内外で学習した知識と実習などの経験を結び付けて振り返り、定められた形式でまとめることができる	これまでに学習した知識や経験をまとめて、学修ポートフォリオ等に記録としてまとめ、自己分析をすることができる

**学修成果の重層的・多元的評価の
到達事例
～アメリカ・ミネソタ州カールトン大学～**

Carlton College Assessment Plan

Learning Outcome 1:

「世界の人々、芸術、環境、文学、科学、制度（何を学ぶかを学ぶこと）について継続的な学びに必要な知識を獲得したことを表す（demonstrate）ことができる」

評価evidence

- ① Research Practice Survey (直接, 全国基準)
- ② 教職員がLO1ルーブリックを用いてカリキュラムについての経験について、学生にフォーカスグループインタビューを実施 (間接, 独自基準)
- ③ Academic Experience Survey (間接, Galotti)
- ④ CARS support survey (間接, 独自基準)
- ⑤ 学生調査データ (間接, 全国基準)
- ⑥ 成績分析 (間接, 独自基準)

Carlton College Assessment Plan

L02: 「学習領域についてかなりの(substantial)知識とその領域の関係した研究または方法論を示すことができる」

評価方法：①基本的には各メジャーとプログラムによる評価。②5年ごとに評価部長オフィスが各プログラムの評価レポートを横断的に分析して総括レポートを供給③これらの学修成果結果を卒業生の就業及び大学院進学データと照合。このレポートを学内横断的に活用

L03:Evidenceに立脚した分析能力を身につける

- ① QuIRK portfolio評価 (直接, 独自基準)
- ② アドバイザーによるL03 ルーブリックを用いての学修成果物の評価 (直接, 独自基準)
- ③ 教職員が初年次セミナーを通じてL03ルーブリックを用いて評価 (直接, 独自基準)
- ④ 教職員がL03ルーブリックを用いて学生の正規教育外(co-curricular)経験についてグループフォーカスインタビューを行い評価 (間接, 独自基準)
- ⑤ 図書館職員情報とliteracy portfolio 評価 (直接, 独自基準)
- ⑥ Research Practices Survey (直接, 全国基準)
- ⑦ Collegiate Learning Assessment (CLAテスト、直接, 全国基準)
- ⑧ 学生調査データ (間接, 全国基準)

L04:問題を公式化し解決することができる

評価方法

- ①アドバーザーがL04ルーブリックを用いて学修成果物を評価（直接, 独自基準）
- ②教職員がL04ルーブリックを用いて正規教育外(co-curricular)経験についてグループフォーカスインタビューを行い評価（間接, 独自基準）
- ③Collegiate Learning Assessment (CLAテスト、直接, 全国基準）
- ④学生調査データ（間接, 全国基準）

LO5：効果的にコミュニケーションができ議論することができる

評価方法

- ①2年生 writing portfolio データ (直接, 独自基準)
- ②初年次セミナーで収集した学修成果物を教職員がLO5ルーブリックを用いて行う (直接, 独自基準)
- ③CLA(直接, 全国基準)
- ④学生調査データ (間接, 全国基準)

L06:選択した分野で専門分野または学際的な研究、
芸術的または生産的独立職に就くことができる

評価方法：

アドバイザーがL06ルーブリックを適用して評価を行う（**直接**、**独自基準**）

**評価結果をどのように測定し、
その結果を改善に活用するか**

評価のための測定方法

直接評価方法	間接評価方法
個別科目のアサインメント 口頭のプレゼンテーション 組み込みテスト項目 キャップストーン・ポートフォリオ プレ/ポスト・テスト 調査プロジェクト・レポート 原稿提出 総合化したテスト 学位論文 免許・認定試験 国家/標準化試験	質問紙調査 (学生生活・授業満足度, 卒業生等) インタビュー フォーカス・グループ・インタビュー ケース・スタディ

評価の期待水準をどのように定義・設定するか

- 許容できるレベルのパフォーマンスを確立する必要がある
例：
 学生の80%が10点のルーブリックで8点以上の合格率で合格する

 学生の85%が満足または非常に満足している
- 期待水準は野心的であり、達成可能でなければならない
- 未達成の目標は、しばしばプログラムの変更と更新の方向性を提供する



継続的な改善のための評価

評価参加者(含学生)は評価結果を分析・議論しなければならない

教育プログラムのPDCAループの例

評価プランの変更	<ul style="list-style-type: none">• 意図された結果を修正する• 支援のための追加データを収集し、制度的成果と整合させる
教育内容や教育方法の変更	<ul style="list-style-type: none">• 科目内容の見直し• 科目目標の見直し• コースの順序を変更する
プロセスの変更	<ul style="list-style-type: none">• コースの頻度やスケジュールを変更する• アドバイスプロセスの改訂• 共同カリキュラムの作成• トレーニングやワークショップを実施する

3ポリシーの見直しからの結論

4つのポリシーの見直しを経験からの気づき

- 目標（DP）を達成するための手段（内容・方法CP）とその検証（評価Assessment P）というサイクルをPDCAすることは重要
- **学位プログラム**（＝日本的“Early Specialization”）のための仕組みであるが、学生目線からの124単位1パッケージのシステムという見方
- **教育単位の中での“つながり”**をどう実現するかが重要
学内の“つながり”＋**学外**と“つなげる”
高～大を“つなげる”、大～企・社・地を“つなげる”
タテのつながり（学年・学期）、ヨコのつながり（科目間）
- **実現可能性**と**検証可能性（測定・分析）**を意識する教育
- **学生自身がいかに成長を実感・説明できるか**

アセスメントの基準と方法

- 1) アセスメントの前提は測定可能な目標設定
- 2) 評価方法は**直接**と**間接**を組み合わせることが重要
- 3) 私学の独自性を考えれば、**全国標準**だけを導入することだけが可視化か？
- 4) **独自性**を活かすにはルーブリックを活用した多元的評価の可能性
- 5) 重層的（評価の位相ごと）で、多元的（複数の評価尺度や方法を組み合わせる）な評価が一般的なアメリカの大学における学修成果の評価

最後に

- ・ 大学教育改革の方向性は汎用性を持った「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的態度」といった学力の3要素（≡学士力、社会人基礎力、コンピテンシー）を育成できる大学教育の質保証メカニズムの確立
- ・ **学修成果の可視化は必然。今後さらに要求は強まる**

cf.骨太の方針2017

- ・ **3つのポリシー（とりわけDPが基本であり）は測定可能なものにし、その結果を大学自らが説明する責任を負う**
- ・ 大学は、他律的に評価されるのではなく、自らの教育理念等と上述の汎用的知識・スキル・態度特性を組み合わせで作成した自らの目標を、**多元的に（複数の方法の組み合わせ）に能動的に自己評価（測定・検証・評価）**することが必要

平成 29 年度第 1 回 FD・SD 研修会
「アセスメント・ポリシーと大学教育の組織的質保証」実施要項

教育支援室

1. 日時：平成 29 年 7 月 20 日（木）16:30～18:00（90 分）

2. 場所：講義棟 25 番講義室

3. 内容と目的

大学における教育・人材育成の目標は、機関全体の理念・能力観や、役割・機能に基づく学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー，DP）として定められ，これを達成するためのカリキュラムやプログラムの編成方針（カリキュラム・ポリシー，CP）が規定される。個々の授業の目的や到達目標，成績評価の基準はCPにしたがい，それがDPの達成を保証するものとなっていなければならない。アセスメント・ポリシーは，これら教育体系の仕組みと実態とを，入学者受け入れの方針（アドミッション・ポリシー，AP）との整合性も含めて評価するための方針であり，大学教育の組織的質保証の中核となる。本研修では，当該分野の第一人者を講師に招き，アセスメント・ポリシーの導入と運用に関連する国内大学教育の現状と本学が検討すべき課題等について，さまざまな観点から議論する。

4. 対象：全教職員

5. スケジュール

司会：古岡 秀文 教授（FD・SD 強化担当副理事）

書記：斉藤 準 講師（教育支援室）

16:30～16:35（5 分）

開会挨拶：柳川 久 理事

16:35～17:35（60 分）

講演：濱名 篤 氏（関西国際大学 学長）

- ・ 大学教育における AP・DP・CP およびアセスメント・ポリシーに関する総論
- ・ アセスメント・ポリシーに基づく大学教育の組織的質保証の取り組み

17:35～17:55（20 分）

質疑・全体討論

- ・ 本学の現状と検討すべき課題等

17:55～18:00（5 分）

閉会挨拶：奥田 潔 学長

平成29年度第1回FD・SD研修会に関するアンケート

設問1 今日のFD・SD研修会に参加したことは、ご自身の教育能力の改善のために有意義でしたか？

1 非常に有意義だった	25
2 やや有意義だった	10
3 どちらともいえない	1
4 あまり有意義でなかった	1
5 まったく有意義でなかった	
計	37

設問2 今回のFD・SD研修会のテーマに関連した追加の質問や意見などがありましたらお書きください。

- ・多様な視点からアセスメントポリシーについて学ぶことができよかったです。
- ・3つのポリシーという大学教育に一方的にあてはめさせている考え方、体系が、英語として一般的でないということにびっくりしました。
- ・本学が目指す到達目標を明確にしないと、昨年度に作ったアセスメントポリシーが絵に書いた餅になってしまうことを気づかされました。貴重な講演、大変勉強になりました。
- ・内容は、全くもって同感、教育の質保証に関して、毎年の検証結果は必ずフィードバックされるように心掛けてほしい。今回の内容を踏まえ、組織としてどう改善に結び付けるのか、きちんと取り組むべき。
- ・とても有意義だった。参加していない先生方にちゃんと資料がまわるようお願いしたい。
- ・個々の教員の努力だけでなく、学科のユニットで再度教育カリキュラムを統合廃止を考えるべき時期であると思う。今まで、教員の興味？に基づいて授業が実施されている科目がみられたが、帯畜大では何を教育し、認定し、卒業させるのかを再度話し合いが必要だと思う。学部と1-2年次一般教育とのリンクが必要
- ・労力を投入する時間の確保も大切だと思う。
- ・教育の質を改善していくためにより戦略的に評価するシステムを作ることが重要だと感じた。
- ・理念の話が多く、具体性がよく伝わってこなかった。
- ・評価のための時間がどれだけ確保できるかが問題。多元的評価は必要不可欠であると思う。いかに真に実のある評価を行うのが大きな課題だと思う。良い講師に来ていただいたと思います。教育支援室の皆様、お疲れ様&ありがとうございました。

設問3 その他、FD・SD研修会全般に関するご意見、ご提案などがあれば自由にお書き下さい。

- ・アンケート集計後は、会議体においてきちんと分析がなされるとともに今後の研修会に何等かの形で反映されることを強く望んでおります。また、アンケート結果、分析結果等はホームページ等において広く周知がなされることも必要かと思えます。
- ・講義がある先生、所用がある先生以外は何をしているのでしょうか？
- ・濱名学長からお話のあった関西国際大学のPDのようなワークショップも取り入れて教員能力の底上げ、又、次世代の役職者選抜のための取組をしていくことは本学のためになるのではと思いました。